

48歳、4児の子育てをしている父親です。平日頃、子ども達には、身近な人を大切に、後悔のない人生を歩んでほしいと願っています。

先日、義母が急逝しました。昼になっても起きてこない母を案じた義父がベッドに向かうと、既に冷たくなっていました。私が妻の実家に着いたのは午後1時過ぎ。警察の検証が行われ、医師の診断で「老化による心不全」と告げられたのは3時でした。

前日まで、昼は近所の方と交流し、夜は義父といつも通りの時間を過ごしていた母。翌日は沼津に泊まり、長女のひな祭りコンサートと一緒に見る予定でした。突然の別れに言葉が失いました。母は料理好きで、妻の実家に行く、いつもたくさんの料理を並べ、「食べて」と勧めてくれました。義理の息子として応えるべく、完食するのが私の役割になっていました。

義父母と一人娘の妻の築いてきた世界観に、私は子ども達ほどには踏み込めず、壊さぬように見守ることに徹していました。

母は幼少期の病氣により片足に障害があり、年とともに長時間の歩行が難しくなりました。義父への負担も増え、昨年の夏、沼津への移住を提案しました。私達が共働きで、なかなか顔を出せない事情から、一応納得してくれ、話は進めたものの、秋に義父が入院すると、母は沼津に来ることを拒否しました。しかし、一人では買い物できず、せめてもと配食サービスの手配を許してもらいました。

義父は退院後も、なかなか体調が戻らず、両親共に食事が十分に取れなくなり、二人の痩せ細っていく姿を見て何度も「沼津に来ませんか」と話しましたが、母の意思は変わらず、「母が拒否できなくなるまで待つしかないのか：」

2・5人称

会計を終え、昼食を取っていなかった義父に、病院のコンビニで菓子パンを買って勧めると、ほとんど食べられなかった母が「私も食べた」と言いました。

その姿に私は驚き、嬉しくなりました。母がおいしそうに菓子パンを頬張る姿を見て、「配食サービスをやめ、好きなものを食べてもらおう」と決意。帰り道にスーパーへ立ち寄り、好きなものを選んでもらいました。

その後、病院の前泊として義父母に私達の家に泊まってもらうことになり、私は、その度に母のために食事を作りまし

た。すると母は、「おいしい、おいしい」と言いながら、おかわりまでしてくれました。その姿に、少しづつでも元気を取り戻してくれているのではないかと期待しました。

病院へ向かう車の助手席では、今まであまり話をしてこなかった母が、たくさん話をしてくれました。

「きこのレンコンのきんぴらがおいしかった。私も作ってみたい」「大根の煮付けは下茹でしたの？」

私の料理への感想や調理方法の話で盛り上がり、病院内の診察待ちの時間も「（妻や父と）こういうことがあった」「元気になった」「こういうことがしたい」と、母は私にたくさん言葉をかけてくれました。

結婚15年目、こんな日が来るとは思いませんでした。数を重ね、義父母は沼津での生活が気に入って、始めていただけに「もっと早く関係を築けていれば」と悔やまれました。

飯田理一朗

母の死後、家を整理していると、母が華道の教授免許を持っていたことを知りました。気付けば本棚には花に関する本が並び、私も茶道を通じて花の話をよく聞いていたので、もし生前に知っていたら、母と私は案外趣味が近くて、もっと語り合えたのではな

いかと寂しさが募りました。以前、グループホームでの傾聴ボランティアで「妻や父と」

「おいしい、おいしい」と言いながら、おかわりまでしてくれました。その姿に、少しづつでも元気を取り戻してくれているのではないかと期待しました。

「おいしい、おいしい」と言いながら、おかわりまでしてくれました。その姿に、少しづつでも元気を取り戻してくれているのではないかと期待しました。

ティアで「介護は2・5人称で接するとよい」と学びました。自分を1人称、対応する身内を2人称、他人様を3人称とした時に、身内は時には、ちょっと距離を取って、あえて礼節を持って当たる。他人様には少し距離を近づけて、身内のように愛情を持って付き合う。この距離感を大切に、と教えていただきました。しかし、母とは適切な距離を築けていなかったと痛感しました。

後悔は先に立ちませんが、母にできなかったことを、これから義父にしていると思います。そして、子ども達には私の経験を生かし、大切な人と笑顔あふれる日々を築いてほしいと願っています。

（原町中）

（原町中）